

[シンポジウム1]

病原体と人類の相即弁証法

— 仏教・西田哲学の視点から —

吉田 眞一

九州大学名誉教授/福岡聖恵病院

相対, 相待, 相補, 相関, 相似, 相愛, 相互, 相反, 相応, 相剋など, 相が使われた概念は多い。すべて, 相手を待つ, のように, 相手との関係を言ったものである。これらの他に, 一つ重要な言葉がある。それが「相即」である。相即とは『広辞苑』によると, 「二つの対立するものが実は相互に融合しあい一体となっていること」とあり, さらに相即不離とは「二つのものが一体となって切り離すことができないさま」(広辞苑)とある。しかし, この説明では相即の論理性が十分に表現されていない。

親鸞は『教行信証』の法性法身と方便法身の関係を説明する部分でこの二法身が「異にして分かつべからず, 一にして同ずべからず」と説明し, 同じ意味で相即相入, 広略相入などの言葉も使っている。これこそが, 仏教哲学をその基層にもつ西田哲学においては「矛盾的自己同一」, 在野の仏哲中山延二によって「矛盾的相即」と表現された論理であり, 仏教的には「一即多 多即一」(華嚴経), 「色即是空 空即是色」(般若心経)の「即の論理」(即とは相反することがそのまま同等で差別のないこと『広辞苑』)である。

この「即の論理」は仏教の根本原理であり, 世界成立の真理である。仏教の立場は「縁起の法」であり, すべては「縁起所生」である。中山延二はこの縁起の法を哲学的に説明し, 矛盾・対立・相反するものを「即」で結びつけた「即の論理」に外ならないと喝破し, その論理を「矛盾的相即」と呼んだのである。これは西田哲学に於ける「絶対矛盾的自己同一」と同じ論理である(西田哲学が仏教哲学であるとも言われる所以である)。また, 鈴木大拙は「即非の論理」と言っているが「即」は相反するものを結ぶ論理であり「非」が含まれているので, 「即の論理」と「即非の論理」は同じ論理性を持つ。医史学は「事実や事象の真理」を問題にするばかりでなく, 「永遠の真理」を追求する学問でなければならない。医史学においても縁起(即の論理)と弁証法の論理に貫かれている。縁起は弁証法であり, 弁証法は相即的でなければならないので, ここではこれを「相即弁証法」とよぶ。

いのちを対象とする医学・生物学には物理や化学でみられるような法則が少ない。メンデルの法則ぐらいであろうか。人間には自由があり, しかも反逆の自由までもあるからであろうか。歴史学で発見された法則にはどんなものがあるのだろうか。武谷三男の三段階論によると, 自然科学は, 1. 現象論的段階, 2. 実体論的段階, 3. 本質論的段階, というふうに発達する。感染症学に当てはめると, 1. 患者が出る, 伝染するという現象の記述, 2. 病気を起こす病原体という実体の発見, と進歩するが, 3. 本質論的段階には達しているのだろうか。そうと言えないのではないか。生命現象の本質はまだわかっていない。相即弁証法による考究が求められる。

シンポジウムでは微生物学(主に細菌学)の歴史から下の三つの場面, すなわち, ①病原体と生体防御の共進化, ②微生物生存と文明発達の弁証法, ③ペニシリンの開発と耐性菌出現の弁証法, を切り出し, 相即弁証法の立場から分析したい。

「普通に因果といえば過去からの限定とかがえられる」「ところが仏教の因果論はこれとは異なる。目的論的なものも因果的である」「仏教では未来からの限定も因果として論ずる」(中山延二)。縁起の法は因果律であるが過去の事実のみ適用されるものではなく, 未来に向かっては行動の原理になるものである。自然科学の因果律と仏教的縁起的因果論の比較は重要なテーマであると思われる。